

編者となって『環境考古学マニュアル』（同成社）が出版されているが、それは多くのその道の専門家が分担してそれぞれの手法を解説したマニュアル本であり、そこでは彼

自身の考えというものをそのまま表明するのは憚られたのであろう。本書の方は著者の環境考古学に対する意気込みを大きな声で、広く呼びかけたものといえる。（鈴木三男）

書 評：吉田外司夫（写真・解説）. 2005. ヒマラヤ植物大図鑑. B5版 800頁, 4色カラー 784頁. ISBN4-635-58031-8. 山と溪谷社, 東京. 価格 13,650円.

ものすごい本が出た。ヒマラヤの植物を、それこそすべて網羅したカラー図鑑である。1771種類の植物が2739点の写真で余すことなく示されている。何れの写真も極めて品質の高いすばらしいもので実にカラフルなのだが、この本は通常の植物写真集とは大きく異なる点がいくつかある。まず、目に付くのは、大きな写真と2, 3枚の小さな写真で各頁が構成され、前者は多くの場合、周囲や背景も写っていて、どのような場所にその植物が生えているのかが良くわかることである。そして頁の右側には1種類ずつ植物の解説が簡潔に書かれている。面白いのは各写真のキャプションで、植物名のあとに撮影日があるのは当然として、その次にJやY3とかの記号、そして地名と標高が記されている。JとかY3というのは、その写真を撮った場所の地図番号で、巻の始めの方に載っている。そこを見ると記号のあとの地名が必ず地図内に出てきて、撮影場所がピンポイントで特定出来るのだ。書いてある日付と標高のデータを加味すれば、その植物を見なければいつ、どこに行けばよいのかたちどころにわかる、と言うものである。もっとも吉田さんの撮影地は私たちがそう簡単には行けないところばかりであるのだが。

著者の吉田外司夫さんに始めて会ったのはネパールはカトマンズで、1985年のことである。確か私はチタワンの植物調査からカトマンズに戻り、次の調査の準備をしているときで、吉田さんもゴサインクンド方面の取材から帰り、次のアンナプルナ方面への準備中だったと聞いている。それは、まあ、運命の導きとでも言えるようなもので、もしこの時の出会いがなければ、とつい考えてしまう。実際、吉田さんがヒマラヤの植物写真撮影を目指してこの地に来始めたのが1984年で、まだ「植物写真家」というより「植物の写真も撮る写真家」だったのではないだろうか。吉田さんが金沢大学の出身で、当時の私は金沢大学に勤めていたのですっかり意気投合し、われわれの植物調査隊のボスの大場秀章先生（東京大学）を始め、メンバーに紹介した。これこそまさに、「植物学のできる」植物写真家吉田外司夫の誕生の瞬間だったと思う。

吉田さんの植物写真のスタイルにはいくつかの特徴がある。彼の言うには先ずは巨理俊次、富成忠夫両氏のスタイルをまねることから始まったという。わたし自身、学生時代には還暦を過ぎた巨理先生のギャジツを担いで山に同

行し、先生と同じ植物を同じスタイルでとることで撮影法を学んだのだが、巨理俊次先生の植物写真は徹底した「植物学のための植物写真」であったと言えると思う。ヒマラヤで植物写真を取り始めた吉田さんはだんだん自分流を作り上げてゆく。その最たるものが「訪花昆虫の目線」ともいえる徹底したローアングルと、植物の背後に広がる景観を画面に取り組んだ画面構成だろう。人の目線から虫の目線への変化は花の見え方を一変させた。花の色やかたちなど、すべてが単なる観賞物から、意味のある命の現れとなった。背景の中に植物をおくことによりその植物の生き様や生態が見えるようになった。あたかもヒマラヤの山に立ってその花を自分が見つめているような世界の広がりを感じられる。

本書の特徴は、ヒマラヤの高山植物を1冊の本に載せ尽くした、と言うばかりではない。巻頭に大場氏の「ヒマラヤの植物研究史」があるほかは、各頁の植物の解説はもとより、「ヒマラヤの植物地理」、「ヒマラヤ山脈の地域区分」、「ヒマラヤの植物の水平分布と垂直分布」、「ヒマラヤ高山植物の適応戦略」の各解説、それに参考文献リストがあり、これらすべてが吉田氏のオリジナルな著作であり、何れも植物学の学術論文として通用する内容を備えていて、まさに「植物学のできる」植物写真家であることを遺憾なく示している。特に圧巻は東西に弧状に伸びるヒマラヤの植物分布を大きく区切る「チャムラン障壁」の発見で、ヒマラヤ中の植物を見て歩いたからこそ説得力を持って示すことが出来たと言える。

ヒマラヤの高山帯ではかがみ込むだけでも容易なことではないのに、地面に這いつくばってひたすら息を凝らしてシャッターチャンスを待つのは実に苦しいものだ。勿論、機材を抱えての山登り、何十日にも渡るトレッキング、風雨や土砂崩れ、また道を失って高山帯を彷徨することもたびたびで、常に命の危険と隣合わせの取材が20数年にも渡って続けられてきたという。この本はそのすべてが昇華して開いた大きな花と言える。この本を開くことにより、だれもがヒマラヤの花々と親しくなることができることに、ヒマラヤの植物を研究しようと言う植物研究者にとっては最高の文献でもある。

（本文は「アサヒカメラ」（朝日新聞社）2005年8月号掲載の文章に加筆したものである）（鈴木三男）